

使徒の働き8章「福音宣教の始まり」

1A 迫害によって広がる福音宣教 1-3

2A サマリア人への伝道 4-25

1B 使徒以外によるしるし 4-8

2B 魔術師シモンからイエスの名へ 9-13

3B 聖霊を金で買おうとする者 14-25

3A エチオピア人宦官への伝道 26-40

1B 荒野への導き 26-35

2B バプテスマの喜び 36-40

本文

使徒の働き8章を開いてください。私たちの使徒の働きの学びは、ステパノの殉教のところまで来ました。彼は、エルサレムにある教会で、食卓に仕えるのに選ばれた七人のうちの一人でした。けれども、信仰と御霊に満ち、知恵と御霊に満ちている人で、反論し、反抗する人々に対して何も言い返せないほど、論駁していました。それで、怒った人々が偽の証人を立てて、ステパノを最高法院であるサンヘドリンに連れ出したのです。そこで、ステパノは弁明ではなく、真理のみことばを語りました。彼らは、ステパノが聖所と律法に対して逆らう言葉を語ったと訴えていましたが、ステパノは聖書から、自分たちの先祖こそが律法を守ったことがなく、預言者を殺し、ついに正しい方、キリストご自身を殺したのだ。そして聖所は、主のおられるところがまさに聖所であり、神殿の建物を偶像視しているのはあなたがただ、ということを話しました。しかも、ステパノは、神の右で立っておられるイエスを見たのです。それで、人々は耳を覆い、一斉にステパノに殺到して、彼に石を投げて殺しました。ステパノは、死ぬ間際まで、イエス様に倣って、「彼らの罪をお赦してください。」と言って息を引き取ったのです。

殉教という悲しい出来事が起こりました。けれども、神の教会は、その迫害を契機にますますその使命を果たしていきます。それは「福音宣教」です。エルサレムに留まっていた彼らは、その周りの地域に福音を伝えながら巡るようになっていったのです。

1A 迫害によって広がる福音宣教 1-3

¹ サウロは、ステパノを殺すことに賛成していた。その日、エルサレムの教会に対する激しい迫害が起こり、使徒たち以外はみな、ユダヤとサマリアの諸地方に散らされた。

ユダヤ人たちがステパノに石を投げていた時に、彼らの上着をサウロという青年が足元で管理していました。上着を脱いで石を投げていたので、その上着を管理していたのですが、これは、サ

ウロが強く、その石投げに賛同していたことを示しています。ここでも、「ステパノを殺すことに賛成していた。」とあります。このサウロこそが、パウロであり、異邦人に福音を語り、世界をひっくり返すのに用いられる器となる人物です。彼はラビ・ガマリエルの門下生であり、ガマリエルは、この道の者たちのやっていることには手を出してはいけなと意見したのにも関わらず、自分はその助言を無視して、迫害の急先鋒となりました。

この日を契機にして、これまでサドカイ派の者たちが中心に迫害していたのが、パリサイ派も加わって、迫害が徹底的なものになりました。律法にあなたがたは逆らっていると、明確にステパノが語ったからでしょう。世界宣教においても、国々は、時には教会に寛容で穏健な態度を取りつつも、あることをきっかけにして徹底的な弾圧を始めることがあります。初代教会もローマからの組織的な迫害は、皇帝ネロから始まりましたが、彼の統治の前半部分ではそんなことは起こりませんでした。大火事が起こり、それがキリスト教徒のせいだと中傷したことで始まりました。

ここで、「使徒たち以外はみな、ユダヤとサマリアの諸地方に散らされた」とあります。使徒たちは何とか留まることが出来ました。これまで使徒たちを捕らえても、天使が助けて脱獄したりして、彼らに手を出しても押し潰すことができないと判断していたからでしょうか。それで、使徒たち以外の他の一般の信者たちに手を加えて行ったのです。しかし、これがイエス様の言葉をまさに実現する出来事だったのです。1章8節をもう一度見返してください、「そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となります。」これまでエルサレムに留まっていた彼らが、興味深い形で外に出て行くようになるのです。

おそらくエルサレムの教会の人々は、信者がどんどん増えて、毎日喜びながら神を賛美し、パンを裂き、祈り、交わっていて、それはとても幸せだったでしょう。けれども、神はそうした霊的に良いと思われる状況を揺るがされることがあります。神は時に、私たちの快適さを中断されることがあります。そして、次の段階へ、神の用意されているご計画が実現していく中で動かしていられることがあります。例えば、カルバリーチャペル・ロゴス東京は、五年ぐらい、日本語学校をお借りして礼拝を献げていました。けれども、クリスチャンであった理事長が学校の所有を他の会社に売り、それがきっかけで出て行かなければいけませんでした。そして、今の場所に至っています。

² 敬虔な人たちはステパノを葬り、彼のためにたいへん悲しんだ。

ステパノを迫害した人たちは何に対して迫害をしたかと言いますと、ステパノがあまりにも天にある神のご臨在に目を留めて、そして聖なる神にしたがってそこ言葉を説き明かしていったからです。神を恐れている人々ならば、確かにステパノの言っていることは本当だとうなずくものだったのです。それで敬虔な人たちが、ステパノを葬り、たいへん悲しんでいます。それにしても、ステパノはとてもイエス様の死なれた姿と似ています。サンヘドリンの議決、イエスを死刑にするという決定に

同意しなかった、アリマタヤのヨセフ、またニコデモが、イエス様の埋葬を行ったのです。

³ サウロは家から家に押し入って、教会を荒らし、男も女も引きずり出して、牢に入れた。

サウロは、まさにユダヤ教のテロリストになり果てました。彼らは家々で集まって、主を礼拝していたので、家から家に押し入って荒らしました。そこから、男だけでなく女に対しても容赦なく引きずり出し、牢に入れたのです。

サウロは、回心してからそれ以前の自分のことについて、多くを語っています。パウロ自身が、牢に入れられて、ヘロデ・アグリッパ二世の前で弁明する時に、こう証言しています。「26:10b-11 祭司長たちから権限を受けた私は、多くの聖徒たちを牢に閉じ込め、彼らが殺されるときには賛成の票を投じました。そして、すべての会堂で、何度も彼らに罰を科し、御名を汚すことばを無理やり言わせ、彼らに対する激しい怒りに燃えて、ついには国外の町々にまで彼らを迫害して行きました。」彼は教会の人々に手紙を書いた時に、自分は使徒たちの中で最も小さな者であると言っています、「I コリ 15:9 私は使徒の中では最も小さい者であり、神の教会を迫害したのですから、使徒と呼ばれるに値しない者です。」彼はテモテには、「I テモ 1:15 私はその罪人のかしらです。」とも言っています。そして迫害を行ったのは、ユダヤ教徒として律法への熱心さのゆえだったと述べています。「ピリ 3:6b-7 律法についてはパリサイ人、その熱心については教会を迫害したほどであり、律法による義については非難されるところがない者でした。」

2A サマリア人への伝道 4-25

1B 使徒以外によるしるし 4-8

⁴ 散らされた人たちは、みことばの福音を伝えながら巡り歩いた。

ここが、非常に大きな言葉です。彼らは迫害されて、身の安全を思って散っていったのですが、そのような逆境の中で、なおのこと、みことばの福音を伝えたのです。散っていつているので、定住していません。いつも移動しなければいけない生活です。けれども、その不便な状況があったので、かえって福音を伝えるために巡り歩くことになったのです。福音宣教には、巡り歩く、足を動かすという要素が大きいです。「ロマ 10:15 遣わされることがなければ、どのようにして宣べ伝えるのでしょうか。『なんと美しいことか、良い知らせを伝える人たちの足は』と書いてあるようにです。」大宣教命令にも、イエス様は、出て行って、すべての民族を弟子とみなさいと、出て行くということを語っておられます。私たちは、このエルサレムの教会の人たちと同じように、自分の快適なところに留まっていたいと願います。けれども、主は、ご自分が救いたいと願われている人のところまで行って、捜しておられます。その福音の足になるのですから、私たちも、福音が届けられるべき人々のところに届くために、動くのです。

そして、彼らが主のみこころをしっかりとわきまえていたことが言えます。「すべての造られた者に福音を宣べ伝えなさい。(マルコ 16:15)」が、主の命令です。ですから、今、自分が置かれている状況の中で、それでも福音を宣べ伝えるという神の命令に従いたいと願って、その結果が、散らされているところで、巡り歩きながら福音を伝えたということでもあります。多くの人が、何が神のみこころなのだろうか？と悩みます。けれども、私が強く疑問に思うのは、神の明らかな御心に心を留めればよいのであって、それ以外のことは、主にお任せすればいいのでは？ということです。パウロが、エルサレムに戻って騒動が起こり、ユダヤ人に証しをしたものの失敗したかのように見えました。多くの方は、他の弟子たちの反対に関わらずそこに行ったことは、みこころではなく、パウロの意地であったと解釈します。それは間違いです。主が夜にパウロに現れてくださり、「23:11 勇気を出しなさい。あなたは、エルサレムでわたしのことを証したように、ローマでも証しをしなければならぬ。」と言われたのです。たとえ逆境の状況に置かれても、そこの中で主のみこころを行うことを求めるのです。すると、その逆境に見えていたことが、実は神の御心を果たすために必要なことだったと後で悟ることがあります。

⁵ピリポはサマリアの町に下って行き、人々にキリストを宣べ伝えた。

食卓に仕えていた七人のうち、ステパノの他にピリポがいました。彼は、散らされて福音を伝えていた一人であり、サマリアの町に下って行ったのです。ここで思い出さないといけないのは、福音書の話です。イエス様は、ユダヤ人と話される時に、敢えてサマリア人のことを取り上げられました。善きサマリア人はその典型例です。そして、サマリアの女にイエス様が近づかれて、ご自身を伝えられたことを思い出してください。その時に女自身が驚き、また弟子たちもその光景を見て驚いていました。その背後に、ユダヤ人とサマリア人の間にとっても根深い確執がありました。

サマリア人の始まりは、紀元前 722 年に起こったアッシリア捕囚です。北からアッシリアが攻めてきて、北イスラエルの人々の多くが捕え移されました。アッシリアは、自分たちが征服した民を互いに移住させる政策を取っていました。イスラエルの人々が他の地域に捕え移されましたが、その北イスラエルの所に他の非征服民が移り住みました。そこで残されていたイスラエル人と異邦人が結婚するようになり、混血の子供が生まれました。これがサマリア人です。さらに元来のユダヤ教に異邦人の宗教が混合されたものが始まりました。したがって、民族的にも宗教的にも純粋ではないサマリア人を、ユダヤ人は嫌うようになったのです。

サマリア人もユダヤ人を嫌うようになりました。南ユダの人々は、紀元前 586 年にバビロンによって捕え移され、70 年後、ペルシアがバビロンを倒した後に帰還します。そしてエルサレムの町の再建を始めたのですが、その時にサマリア人がやってきて「いっしょに再建をしたい」と申し出たのです。けれども、帰還したユダヤ人はきっぱりと断りました。今度はサマリア人が怒り、その工事を阻止するようになり、一時中断させることまでしたのです(エズラ 4:1-4、ネヘミヤ 4:1-3)。ですか

ら、何百年にもわたる確執の歴史があり、遠い民族ではなく、互いに近いからこそ起こる民族と宗教の違いのもつれがあるのです。

今で言うなら、イスラエルでは、ユダヤ人とパレスチナ人の間の確執があります。日本で言うなら、日本人と韓国人、また在日韓国人や朝鮮人との確執があるでしょう。こうした壁があるけれども、けれども、ピリポは主の命令に従うことを優先したのです。

⁶ 群衆はピリポの話聞き、彼が行っていたしるしを見て、彼が語ることに、そろって関心を抱くようになった。⁷ 汚れた霊につかれた多くの人たちから、その霊が大声で叫びながら出て行き、中風の人や足の不自由な人が数多く癒やされたからである。

ピリポもステパノがそうであったように、使徒たちしか行っていなかった不思議やしるしを行っていました。彼らは使徒たちに祈られて、手を置かれていましたが、その時に賜物が与えられたのかもしれませんが。ここでピリポが行っているのは、まさにイエス様が行われていたことですね。汚れた霊が人から出て行きます。また中風の人、足の不自由な人たちが多く癒やされています。イエス様が、言われたとおりです。「ヨハ 14:12 まことに、まことに、あなたがたに言います。わたしを信じる者は、わたしが行くわざを行い、さらに大きなわざを行います。わたしが父のもとに行くからです。」

キリスト教会では、しるしや不思議は、みことばの確かさのために与えられた一時的なものであり、また、十二使徒だけのものであり、使徒の時代が終わった時、聖書が正典化された後は、そのような著しい働きは必要なくなったという考えがあります。終焉説とも言います。けれども、ここで起こったことを見ていると、著者ルカは全く別のことを強調しているように見えてなりません。使徒たちには確かに権威が主ご自身から与えられましたが、しかし、使徒たちはエルサレムに留まっていて、一般の信者が出て行って、彼らがみことばを宣べ伝え、そしてその中で、しるしや不思議が行われていたという事実です。

聖霊の働きについて、キリスト教会は両極端の意見を持っています。一つは、今、話したように使徒の時代で奇跡は終わったとする立場です。もう一つは、聖書に書かれている奇跡だけでなく、他にも、神はしるしや不思議を行われるのだということです。しかし、みことばの確かさを知るためのしるしであり、神はみことばこそを高めておられて、しるしそのものを求めるように命じておられません。むしろ、パリサイ人たちが天からのしるしを求めた時に、もう与えられない、ヨナの徴だけだと言われたのを思い出してください。実は、この両極端の考えの問題には共通しているのです。それは、「自分の経験や理解に頼っている」ということです。自分の経験が御言葉に優先させてしまっているのです。そして、聖霊による超自然の働きは無くなったと言っている人たちも、自分の理解を優先させてしまい、理解を超える不思議を神が今も行われる可能性を排除しているのです。

使徒の働きの時代のように今、奇跡を見ないというのは、神ご自身のせいではなく、我々人間側にあります。教会に信仰がそれだけあるのか？イエス様は何度となく、不信仰を咎められましたね。神への信仰ではなく、他により頼むことが数多くあり、神への全き信頼を寄せていない問題があります。また清さがありません。これから、金で聖霊の賜物を買おうとするシモンを見ていきます。そういう人には、奇跡は全く無関係のことです。ですから、世界中で今に至るまで、苦しみの中にいる人々、貧しい人々、また全く無名の人を通して、奇跡の賜物が用いられています。

それから、使徒の権威の継承をキリスト教会は強調してきました。東方の正教会も西方のカトリックも、自分たちが使徒の権威を継承している教会なのだと主張します。けれども、そこが、著者ルカが違うよ、と言っていることではないでしょうか？普通の人たちが、使徒と同じように用いられているのです。パウロは、ペテロ、ヨハネ、ヤコブのことを「おもだった人たち」と呼びましたが、ガラテヤ書でこう言っています。「ガラ 2:6 そして、おもだった人たちからは——彼らがどれほどの者であっても、私にとって問題ではありません。神は人を分け隔てなさいません——そのおもだった人たちは、私に対して何もつけ加えはしませんでした。」主は、みなさんを用いることができるということです。イエスの名によって、大きな働きをすることができるということです。

⁸その町には、大きな喜びがあった。

福音の実は、喜びです。使徒の働きでこのことが何度となく出てきます。教会が興されたばかりの様子はこうです。「2:46-47a そして、毎日心を一つにして宮に集まり、家々でパンを裂き、喜びと真心をもって食事をともにし、神を賛美し、民全体から好意を持たれていた。」喜びがいつも伴っています。私たちにも、主が大きな喜びで満たしたいと願われて、それで御業を行いたいと願われています。

2B 魔術師シモンからイエスの名へ 9-13

⁹ところで、以前からその町にはシモンという名の人がいた。彼は魔術を行ってサマリアの人々を驚かせ、自分は偉大な者だと話していた。¹⁰ 小さい者から大きい者まで、すべての人々が彼に関心を抱き、「この人こそ、『大能』と呼ばれる、神の力だ」と言っていた。¹¹ 人々が彼に関心を抱いていたのは、長い間その魔術に驚かされていたからであった。

魔術とありますが、彼が後で金で聖霊の力を買おうとしているところを見ると、もしかしたら、手品師であったかもしれません。種明かしを金で買うことは、マジシャンの間ではよく行われることです。もしかしたら、悪霊によるのかもしれませんが。いずれにしても、ここでの著者ルカの強調点は、シモン自身に、その力の栄光が帰せられていたことです。「自分は偉大な者だと話していた」「この人こそ、『大能』と呼ばれる、神の力だ」ということです。

¹² しかし人々は、ピリポが神の国とイエス・キリストの名について宣べ伝えたことを信じて、男も女もバプテスマを受けた。¹³ シモン自身も信じてバプテスマを受けると、いつもピリポにつき従って、しるしと大いなる奇跡が行われるのを見ては驚いていた。

シモンの魔術に対して、ピリポの行っていた奇跡は、「神の国とイエス・キリストの名について宣べ伝えた」ことから来たものです。ピリポは、自分自身を宣べ伝えたのではなく、神の国を伝え、またイエス・キリストの名を伝えました。自分の力ではなく、イエスの名による力であることを宣べ伝えました。イザヤなどが見た、御国の姿には囚われ人が解放され、足の不自由な人が立ち上がるなどがありました。それをイエスが行われ、この方こそが御国の王キリストであることが明らかにされました。ピリポは今それを行っていますが、主ご自身が彼を通して行われています。パウロが言いました、「Ⅱコリ 4:5 私たちは自分自身を宣べ伝えているのではなく、主なるイエス・キリストを宣べ伝えています。私たち自身は、イエスのためにあなたがたに仕えるしもべなのです。」

信じた者たちは、男も女も水のバプテスマを受けました。シモンも信じたと言っていますが、ここで、彼の関心は、罪からの悔い改めや救いではなく、「しるしと大いなる奇跡」そのものでした。その彼の心が、次の出来事で明らかにされます。

3B 聖霊を金で買おうとする者 14-25

¹⁴ エルサレムにいる使徒たちは、サマリアの人々が神のことばを受け入れたと聞いて、ペテロとヨハネを彼らのところに遣わした。

教会が始まった時から、指導的な働きをしていたのはペテロとヨハネでした。美しの門で足なえの男を立ち上がらせた時、ペテロだけでなくヨハネもいました。この後、ペテロの働きは記されていますが、ヨハネは使徒の働きの中では出て来なくなります。ここでのサマリア宣教の後には、それぞれが巡り歩きながら福音宣教に関わっていくからです。

これまで、ユダヤ人だけが神の言葉を聞き、信じてバプテスマを受けていきました。けれども、サマリア人に対して、御霊が働かれています。確かに神から出たものであることを追認するために、エルサレムの教会は二人を遣わしたのです。イエス様ご自身が、サマリアの女に近づかれ、その女によって福音がサマリアの町に広まりました。また、十人のらい病人がいて、十人をイエス様が癒されたけれども、戻って礼拝したのはサマリア人だけだったのを覚えています。ですから、偏見を退けて、聖霊が今や、サマリア人の間でも働いておられることを知り、それを神からのものと確認するために遣わしたのです。ペテロが、イエス様から「わたしは天の御国の鍵を与えます。(マタ 16:19)」と言われたことを思い出してください。神の御国の中で、ユダヤ人だけでなくサマリア人も主の救いを受け入れる鍵が、ペテロに今、手渡されているとみなしてよいでしょう。

それからヨハネがかつて、主を拒んでいるサマリア人に対して、「火を降らせましょうか？」と言ったのを覚えていますでしょうか。「ルカ 9:54 弟子のヤコブとヨハネが、これを見て言った。「主よ。私たちが天から火を下して、彼らを焼き滅ぼしましょうか。」」そのようなことを言ったヨハネが、今はサマリア人に救いをもたらされた神に忠実になるために、遣わされています。このようにして、主は両者の間の平和になり、隔ての壁を壊してくださっています。

¹⁵ 二人は下って行って、彼らが聖霊を受けるように祈った。¹⁶ 彼らは主イエスの名によってバプテスマを受けていただけで、聖霊はまだ、彼らのうちのだれにも下っていなかったからであった。

イエスの御名を告白するならば、それは聖霊の働きであることは間違いありません。「I コリ 12:3b また、聖霊によるのでなければ、だれも『イエスは主です』と言うことはできません。」そうであれば、なぜ、「彼らは主イエスの名によってバプテスマを受けていただけで、聖霊はまだ、彼らのうちのだれにも下っていなかった」ということができるのでしょうか？それは、イエス様の約束にあることで、聖霊が臨まれると力を受けて、わたしの証人になるという約束であります。聖霊の働きによって、イエスを主と告白できます。イエスを信じる信仰は、聖霊によってもたらされます。しかし、それ以上の聖霊の働きがあります。確かに、主がここにおられること、神の国が臨まれていることを証しするために、聖霊が注がれるのです。ペテロがすでに、ユダヤ人だけではなく、主の名を呼び求めるすべての人にこの約束があることを話していました。「2:39 この約束は、あなたがたに、あなたがたの子どもたちに、そして遠くにいるすべての人々に、すなわち、私たちの神である主が召される人ならだれにでも、与えられているのです。」

みなさんは、いかがでしょうか？イエスの名によってバプテスマを受けたけれども、聖霊は下られたでしょうか？イエス様が生きておられることを、人々に証しできているでしょうか？その力が不足しているのであれば、聖霊のバプテスマを受けるよう切に願い、祈ってください。

¹⁷ そこで二人が彼らの上に手を置くと、彼らは聖霊を受けた。¹⁸ シモンは、使徒たちが手を置くことで御霊が与えられるのを見て、使徒たちのところに金を持って来て、¹⁹「私が手を置く者がだれでも聖霊を受けられるように、その権威を私にも下さい」と言った。

手を置くことによって、聖霊が下られることが聖書には記述されています。初めはモーセがヨシュアに手を置いた時です。「申命 34:9 ヌンの子ヨシュアは知恵の霊に満たされていた。モーセがかつて彼の上にその手を置いたからである。」パウロは、テモテに按手したことによって、彼に神の賜物が与えられたことを言及しています（II テモ 1:6）。ここでも手を置いて祈り、それで聖霊を受けました。おそらく異言や預言など、ヨエル書にある約束やこれまでのしるしを見ていると、そうであろうと考えられます。

ところが、自分も御霊を受けたいと願うのではなく、なんと自分が手を置いて、聖霊が受けられるように、その権威をくださいと金を持ってきてお願いしているのです！魔術といっても、もしかしたらそれは偽物で種明かしを売買していた手品師だったかもしれません。こうして、キリストの御名があがめられなければいけないところで、自分自身の権威や力が与えられることを願うのは、教会にとって呪いです。しかし、自分が認められるために教会に近づいてくる人々がいます。主の御名があがめられるためではなく、自分自身が人々に受け入れられるために働きの地位が与えられたいと願う人たちがいます。けれども、御霊の賜物は、全くそういった動機とは相いれない、聖なるものです。豚に真珠は渡せないという、イエス様の言葉のとおりです。

²⁰ しかし、ペテロは彼に言った。「おまえの金は、おまえとともに滅びるがよい。おまえが金で神の賜物を手に入れようと思っているからだ。²¹ おまえは、このことに何の関係もないし、あずかることもできない。おまえの心が神の前に正しくないからだ。²² だから、この悪事を悔い改めて、主に祈れ。もしかしたら、心に抱いた思いが赦されるかもしれない。²³ おまえが苦い悪意と、不義の束縛の中にいることが、私には見えるのだ。」

シモンは信じたと言っても、ここにある心の問題があることは、今、初めて明らかにされ、悔い改めが必要であることを教えられています。ペテロは、「おまえが苦い悪意と、不義の束縛の中にいる」と言っていますが、シモンの問題は自分が偉大な者、大能と呼ばれる、神の力と呼ばれていたことがなくなったことに、苦みを覚えていたのです。自分のかつて持っていた栄光が、ピリポの伝道の働きの中で消えてなくなったことに対する苦みです。そしていつまでも、お金でそういった力を得ることができるのだと考え、また人々を欺くことができると考える不義の束縛に生きていました。

「私には見えるのだ」とペテロは言っています。これまでも、神の人は人の心にあることや、隠れて行っていることを神から知らされることがありました。エリシャが、自分のしもべゲハジが、こっそりと、らい病が清められたナアマンから金や贈り物を受け取り、自分のものにしようとしていたのを見ていました。エリシャは、「Ⅱ列 5:26 今は金を受け、衣服を受け、オリーブ油やぶどう畑、羊や牛、男女の奴隷を受ける時だろうか。」と言っていますが、ゲハジが何を考えていたのか見えていたのです。これを、「知識のことば」と言います。「Ⅰコリ 12:8 ある人には同じ御霊によって知識のことばが与えられています。」超自然的に、ある人について知識が与えられる賜物です。

²⁴ シモンは答えた。「あなたがたが言ったことが何一つ私の身に起こらないように、私のために主に祈ってください。」

う～ん、どうなんでしょうね？シモンは、自分の心にあつた不義を悔い改めるのではなく、「おまえの金は、おまえとともに滅びるがよい」ということが起こらないように祈っています。そして、自分自身が祈るのではなく、「私のために主に祈ってください」と祈っています。へりくだって悔い改めると

う知識が、まだ与えられていない感じがします。

²⁵ こうして、使徒たちは証しをし、主のことばを語った後、エルサレムに戻って行った。彼らはサマリア人の多くの村で福音を宣べ伝えた。

ペテロとヨハネは、ここから自分たちもサマリア人に対して福音を宣べ伝えています。ついに、ユダヤ人の枠組みを超えて福音宣教の従事していきました。今日のメッセージ題は、「福音宣教の始まり」なのですが、もちろんエルサレムでの働きは福音を宣べ伝えることです。けれども、出ていて、福音の必要な人々に届いて伝えるという事はしていませんでした。イエス様は、ガリラヤ地方を巡り歩きましたが、同じように彼らも巡り歩こうようになっていったということです。

3A エチオピア人宦官への伝道 26-40

1B 荒野への導き 26-35

²⁶ さて、主の使いがピリポに言った。「立って南へ行き、エルサレムからガザに下る道に出なさい。」そこは荒野である。

ここからは午前礼拝で話したのですが、まだお話ししていない部分も加えて話していきたいと思えます。主の使いは、サマリアから、このガザに下る道、荒野のところにピリポを遣わします。サマリア人がどんどん救われていったのですから、自分はそこに留まりたいと願うのが人間の自然な思いだと思いますが、急に方向転換を迫られます。一見、福音宣教の働きを止めなさいとまで感じるような指示です。けれども、エルサレムの教会が激しい迫害を起こったことがかえって、本格的な福音宣教の始まりになったのと同じように、この方向転換は新たな福音宣教の一步なのです。

²⁷ そこで、ピリポは立って出かけた。すると見よ。そこに、エチオピア人の女王カンダケの高官で、女王の全財産を管理していた宦官のエチオピア人がいた。彼は礼拝のためエルサレムに上り、²⁸ 帰る途中であった。彼は馬車に乗って、預言者イザヤの書を読んでいた。

エチオピア人の宦官についてですが、エチオピア人がユダヤ教を受け入れていることについては、お話ししました。今は、「宦官」ということに注目したいと思います。律法の中で、集会には入ることができないというものがありました。「申 23:1 辜丸のつぶれた者、陰莖を切り取られた者は【主】の集会に加わってはならない。」子孫を生み出すことのできない者が、神の集会にいることは象徴的に許されないという考えがそこにはあります。霊的には、教会はいつも、信仰による子孫が増えていくことが前提なのに、自分自身だけを求めたら教会の死を意味します。それと似ています。

けれども、神の恵みは広がります。キリストが来られて御国が来たら、これらの人々も神殿で礼拝ができることが約束されているのです。「イザ 56:3-5 【主】に連なる異国の民は言うてはならな

い。「【主】はきっと、私をその民から切り離される」と。宦官も言うてはならない。「ああ、私は枯れ木だ」と。なぜなら、【主】がこう言われるからだ。「わたしの安息日を守り、わたしの喜ぶことを選び、わたしの契約を堅く保つ宦官たちには、わたしの家、わたしの城壁の内で、息子、娘にもまさる記念の名を与え、絶えることのない永遠の名を与える。」すばらしいですね、エチオピアの宦官は、異邦人であったでしょうし、また宦官であるから、どちらにも当てはまります。ところが、神の喜ばれることを喜びとして、契約を保つのであれば、神の都の中、神の家において、永遠の名が与えられるという偉大な約束です。彼は、宦官だったので、もしかしたら、礼拝に行ったとしても、異邦人の庭までしか行けなかったかもしれません。主に近づきたくとも、近づけない。そういった虚しさを抱いていたかもしれません。

²⁹ 御霊がピリポに「近寄って、あの馬車と一緒に行きなさい」と言われた。³⁰ そこでピリポが走って行くと、預言者イザヤの書を読んでいるのが聞こえたので、「あなたは、読んでいることが分かりますか」と言った。³¹ するとその人は、「導いてくれる人がいなければ、どうして分かるでしょうか」と答えた。そして、馬車に乗って一緒に座るよう、ピリポに頼んだ。

宦官の虚しさには、預言書を読んでも分からないということがありました。まだ心に覆いがかかっている、真理が見えなくなっていました。そこで聖霊の働きが必要です。また伝道し、みことばを説き明かす賜物が必要です。パウロがテモテに言いました。「Ⅱテモ 2:15 あなたは務めにふさわしいと認められる人として、すなわち、真理のみことばをまっすぐに説き明かす、恥じることのない働き人として、自分を神に献げるように最善を尽くしなさい。」

³² 彼が読んでいた聖書の箇所には、こうあった。「屠り場に引かれて行く羊のように、毛を刈る者の前で黙っている子羊のように、彼は口を開かない。³³ 彼は卑しめられ、さばきは行われなかった。彼の時代のことを、だれが語れるだろう。彼のいのちは地上から取り去られたのである。」

³⁴ 宦官はピリポに向かって言った。「お尋ねしますが、預言者はだれについてこう言っているのですか。自分についてですか。それとも、だれかほかの人についてですか。」³⁵ ピリポは口を開き、この聖書の箇所から始めて、イエスの福音を彼に伝えた。

イザヤ書 53 章からですが、そこはキリストが民の身代わりになって罪と咎を負われ、このような形で死なれることの預言です。イザヤ自身のことなのか、誰なのか分からないと宦官は言っているのですが、これがイエスについてのことなのだとピリポは解き明かしました。聖書のどこの箇所から、そこでイエスを宣べ伝えることはできますし、聖書全体はそうになっています。なぜなら、聖書全体が、イエスご自身について証しているからです。

2B バプテスマの喜び 36-40

³⁶ 道を進んで行くうちに、水のある場所にきたので、宦官は言った。「見てください。水があります。」

私がバプテスマを受けるのに、何か妨げがあるでしょうか。」³⁸そして、馬車を止めるように命じた。ピリポと宦官は二人とも水の中に降りて行き、ピリポが宦官にバプテスマを授けた。³⁹二人が水から上がって来たとき、主の霊がピリポを連れ去られた。宦官はもはやピリポを見ることはなかったが、喜びながら帰って行った。

なんとすばらしいことでしょうか！宦官は、救いの泉に到達することができました。キリストの身代わりの死こそが罪の赦しを与えることを知りました。それで自ら、水のバプテスマを受けたいと願ったのです。そしてピリポは同意して、そこで授けました。使徒の権威の継承と同じように、キリスト教会は洗礼も大きな障壁にしてしまってきました。どのような洗礼が有効なのかということで議論して来ましたが、けれども、ここまで単純なのです。信じてバプテスマを受けるのです。

そして、そこにはユダヤ人、異邦人の差別はありません。すべてのために死なれたイエス様です。この方を知って、それでこれまでであった壁、宦官としての壁が崩れました。ちなみに、エチオピアにはユダヤ教のみならず、エチオピア正教会というキリスト教があります。この宦官が第一の弟子であるという言い伝えです。

ピリポは他のところに御霊で連れ去られました。興味深いことに、テサロニケ第一 4 章の、教会の携挙における「引き上げる」というギリシア語とここは同じ言葉です。半ば暴力的に、誘拐にあったかのように、連れ去られたのです。ピリポにはピリポの召しがあります。伝道者としての召しがあります。この宦官のことは、主が何とかしてくださいませ。事実、彼は喜びに満たされて、彼自身によってエチオピアに福音が広がって行ったことでしょう。似たようなことに、レギオンに取りつかれた男がいました。イエス様は、彼に任せて、彼がデカポリス地方で自分の身に起こったことを伝えるように言いつけました。

⁴⁰それからピリポはアゾトに現れた。そして、すべての町を通過して福音を宣べ伝え、カイサリアに行った。

アゾトという町は、旧約聖書のアシュドテであって、ガザもアゾトも地中海沿いの町です。ピリポは、さらに北上して同じく地中海沿いの都市、カイサリアに行きました。その間もすべての町を通過して福音を宣べ伝えます。

みなさんにもぜひ、伝道する働きに関わってほしいと願います。確かに賜物が与えられた人、召命が与えられた人々がいます。けれども、すべての弟子が福音を宣べ伝えるようにイエス様から命じられています。そして、救いを受けた人々から、私たちは喜びを受け取ることができます。サムリア人の間で大きな喜びがありました。今、エチオピアの宦官が喜びに満たされています。神の救いは喜びをもたらす、私たちは喜びをもたらす良き知らせを携える使命を帯びているのです。